

# ホテル学校だより

## 鳥川の山歩きをもっと楽しもう！ オススメの絶景スポットをご紹介します

毎週、多くの人を訪れる「鳥川ホテルの里」の山歩き。コースのあちこちには素晴らしい景色が見渡せる見晴らし場があります。今回は、山歩きコースのおすすめ眺望ポイントを 3 つご紹介します。

### ① 見晴ヶ丘

小安堂登山口から水晶山へ向かって 10 分ほど登ると、鳥川の田園風景が一望できる見晴ヶ丘につきます。集落の雰囲気がよく伝わるここからの眺めはパンフレットやテレビ番組でもよく利用されています。



### ② 平成の大崩れ

京ヶ峯から七曲峠に下る途中にある北側の斜面が開けたポイントです。その名の通り、平成になってから崖が崩れて自然の展望台が出来上がりました。眼下には新東名が延び、晴れた日は名古屋駅前のビル群を見ることが出来ます。



### ③ 沢山～音羽富士

アップダウンの続くルートで難易度も高めですが、南側の斜面は植林された木がまだ大きくなっていないため、豊川から三河湾までの眺望が開けています。コースの前後も見通せるので、まるで森林限界を超えた高山帯を歩いているような気分が味わえます。



鳥川の山歩きコースには他にもたくさん見晴らし場があります。目の前に広がる絶景にはきっと山歩きの疲れも吹き飛ばすことでしょう。季節に応じて草花や田畑、山の木々も表情を変えます。ぜひお気に入りスポットを見つけてみてください。

なお、こうした見晴らし場は地元の鳥川ホテル保存会や森林ボランティア団体「水守森支援隊（みまもりしえんたい）」、岡崎年金者里山ハイキングの会などの有志の手によって維持・整備されています。

### ホテル学校歳時記（No. 12）

## 川岸斜面の樹木管理 間伐と枝打ち作業

農林業のあり方が大きく変化したことで人間と里山との関係もまた変化し、小型生物には不都合な環境があちこちで見られるようになった。川岸の間伐・枝打ち・除伐・下草刈りが行き届かないことで、ゲンジボタルやヘイケボタルたちの飛翔空間が狭くなっておりとても心配である。

ゲンジボタルが夜間休憩や休息する広葉樹（カシ・ツバキ・ハンノキ）などが少なく、スギ・ヒノキが優先した状態になっている。山主の高齢化で手入れが遅れ、暗がりと 80% の湿度の空気が保たれたホテルにとって心地よい空間が消滅しつつある。

サナギの時代は土の中の細菌に侵され、成虫の時代はクモや毛虫類に攻撃される環境で飛翔が強いられる。自然を放任してはかえって環境は破壊の方向に前進するのであり、回復が可能な負荷を与えないと、健全な里山環境を維持することはできない。

（ホテル学校名誉校長・古田忠久）

## ホテルクイズに挑戦

ゲンジボタルは、水生巻貝の一種である「カワニナ」（川の貝という意味）を食べて成長します。さて、一匹のゲンジボタルが成虫になるまでには、いったいカワニナを何個くらい食べるのでしょうか？

① 5～10個

② 20～30個

③ 50～60個



（答えは裏面に！）

## ホタルを育む森の秘密③～森林再生に向けた取り組み～

私たちが毎日使う水の源であり、生活を土砂災害や洪水から守ってくれる森林。しかし、間伐が遅れて荒れた山が増えてきています。森林を再生するためにはいったい何が求められているのでしょうか？

一つは、より多くの市民の皆さんに森林に関心を持っていただくことが大切です。四季を通して森とふれあい、森の働きを知ることで「森を守っていこう」という思いが地域の中で広まっていくことが重要です。そこでホタル学校では、森に親しむ山歩きイベントや、森と水の関係を学ぶことを目的とした環境教室や間伐体験イベントを随時開催しています。



環境教室で森の働きを学ぶ



木の駅に出荷される間伐材

また一方で、実際に山に入って間伐を進めていく必要があります。しかし低質な間伐材は伐りだしても値段が安いいため、山主はやる気がおきません。そこで、岡崎市では平成27年より「額田木の駅プロジェクト」が実施されています。「木の駅」では通常1トンあたり3,000円程度にしかない間伐材を、市の負担金を上乗せして1トンあたり6,000円で買い取っています。「木の駅」の仕組みが始まったことで山主や森林ボランティア団体の皆さんが間伐を進めるようになり、2年間で既に2,000トンほどの間伐材が出荷されました。森林再生に向けてもう一つ重要な要素は、山から出てくる木材を地域の中でどう活用するか？ということです。今回は木を活かす様々な取り組みについて詳しくご紹介していきます。(ホタル学校・唐澤)

## 再び「星が垂れる」環境をホタルクイズ解答

**正解は「③」の50～60個**

一匹のゲンジボタルが成虫になるまでには、およそ50～60個のカワニナを食べます。(幼虫は約9か月間、川の中で過ごします。)鳥川では、毎年1,000匹以上のホタルが確認されていますが、それは少なくとも5万～6万個のカワニナが食べられたということを意味しています。ホタルの舞は、その川に十分な数のカワニナが毎年育つことができるだけの環境が整っているということの証拠です。ホタルの光はまさに河川環境のバロメーターといえるでしょう。



ホタルの語源は諸説ありますが、その一つに「星が垂れる」が詰まって「ほたる」になったという説があります。近年、ホタルが見られなくなり、各地で保護活動が盛んに行われています。しかし、その語源たる星降る夜空が見られなくなったことにはあまり気づいていないのではないのでしょうか。夜空を見上げてみてください。街中で「昴(スバル)」が見えますか？星の見える環境は、大気汚染や光害、省エネのバロメーターになります。写真のような星空を取り戻すため今、私たちに何ができるか、一緒に考えていきましょう。(ホタル学校・神谷)

